

いぶき 11 号平成 23 年 11 月

世界の偉人たち「驚きの日本発見記」

第10回：エメエ・アンペール（1819～1900年）

商人街の店に見本として並べられた工業製品が、どのように多種多様であろうとも、一貫した特性を示している点がある。私は、その特性を、たとえ専門家側の抗議があろうとも恐れることなく「上品な風格にある」と断定する。江戸の制作者は、完全に技術家である。

（出典『絵で見る幕末日本』講談社）

幕末の1863年に来日したスイスの教育者であり政治家であるアンペールは、時計組合から対日使節団として派遣され、日瑞修好通商条約を締結させた人物です。日本滞在中の見聞を『Le Japon Illus-tré』という本で図版をふんだんに使って紹介しています。アンペールは、金物細工師や時計師などの幕末の多くの職人を観察し、その卓抜した技術に感心して「日本人のもつ技巧は極限に達している」と述べています。またアンペールは、日本が商業上の「手強い競争相手」になる可能性を言及していますが、その予見はあざやかに的中しました。

日本人がいつからその手業が巧みになったのか、その原点はとても古いものです。例えば、世界最古の土器はなんと日本の縄文土器で1万6500年前のもの。これが現在日本が世界に誇るセラミックス技術の原点になっています。遙か縄文から続く技術・ものづくり大国、それが日本なのです。（M. I.）

